

Title	明治維新史讀本(田中惣五郎著, 千倉書房發行)
Sub Title	
Author	高橋, 碩一(Takahashi, Shinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.1 (1938. 8) ,p.139- 140
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に、本翻譯の完成が一日も速かならん事を祈るものである。

(今宮 新)

明治維新史讀本

(田中惣五郎著
千倉書房發行)

最近に於ける維新史研究が文部省の維新史料綱要の刊行を先頭とする新史料の夥しき發表に空前の活況を呈して居ることは喜ぶべきであるが、他面あらゆる視角よりする綜合的研究の發達がともしればその學的成果と現象形態學的研究との遊離を感ぜしめて居る時、それらの研究の上に立つて、しかも錯綜極りなき維新史の變轉を『正しく平易に』敘述せんと試みた本書の著者の苦心は十分認められて然るべきであらう。

維新史に關する著書は實に驚くべき數に上つてゐるが、大衆に縁遠い専門的研究でなければ、卑俗な、學的意義の尠いものが多い時、手頃な容積に巧みに盛られた興味ある本書の内容は維新史に關心を有つものゝ一讀をかち得る資格を十分に握つてゐる。

『ペルリの日本遠征は……米國にとつては、世界の産業資本國の一環として、當然執るべき既定の方針だつたのです。』

『金力を擁した商人、高利貸は……政治的には極めて無力なのです。といふのも、高利貸資本や、商業資本といふものが、本來封建的なものに依存して發達したものであり、武士階級が、農民を卵を産む雞と考へたと同様の意味で、商人、高利貸にとつての幕府や諸侯や武士は、農民をひつくるめて、一列の雞だつたのです。支配されて利を啗はせられて居たとしたら、大抵

のところは、現制度に妥協してしまふでせう。』

『幕末の國際資本の戰術は常に一度支那でテストをした上で、最良の策を日本に行はうとした形跡があります。』

『本質的に見て、幕末の開國は自己否定ですが……斷片的知識によつても、通商がいかに不可避なものであるかは、彼等も充分に知らされて居ます。たゞそのために封建社會が密閉した棺内に保管せられた木乃伊が、新鮮な空氣に觸れて、直ちに崩壊過程を辿るといふ點が困るだけです。』

以上二、三摘出した部分だけでもそれらが我々に既に何等かの機會に屢々眼に觸れたことのあるのに氣付かれるであらう。著者はかく諸方面の著書を參酌取捨して著者の云ふ『凄まじい力』としての『國際性の裏打』につとめてゐるのである。しかもそれらが比較的擬音的效果に止つたのは一にそれらに註記が施されなかつた爲と思はれ、廣汎なる引用史料に典故の示されなかつたことと共に既に(他の機會に服部之總氏によつて指摘された所であるが)、評者は著者折角の努力の爲に惜しまざるを得ない。

最後に一言言及し度いのは、本書が前半の出色にも拘らず、後半著しく平坦化して精彩を缺いて居ることである。既に緒言に於て

『庶民は……一般的には自爲發生的な素朴な壓力を、一揆、打毀の形で、或は聲なき聲で、訴へて居るに過ぎません。しかしこの聲と形が一番決定的な力であることを、肩に當る人々が、漠然と感じて居たことは史實の證明するところですよ。』

といみぢくも言放たれながら、思想的動向の極度のスパークの起

らんとした慶應二―三年の敘述にしてからが、専ら表面的事象に壓倒されて、かの問題の『えゝぢやないか』の如きもほんのお副物の程度であり、このあたり著者の言ふ聯關性が甚だ影薄く『封建的日本が、新しい日本に脱皮せんとする變換時代』と冒頭に大書された我が明治維新が終りに近づくと隨つて政争臭を増してしまつたことは残念であつた。

然し、それらは決して著者の眞意ではなく、専ら『維新史を正しく平易に書く』爲の犠牲となつたものであらう。尠くとも從來の二川分流維新史觀等から見れば平易な記述の中にあらゆる方面の史實の聯關性を摘出せんと試みたゞけでも、本書は劃期的「明治維新史讀本」であり「入門書」と賞讃されてよからう。

(高橋碩一)

樂翁公傳

(澁澤榮一著
岩波書店發行)

世に徳川三百年の政治と云ふことがよく行はれるが、一見してそれは如何にも只平穩安逸にのみ打過ぎたるかに覺えるとは云へ、之が内實に於いては必ずしも高きより低きに流れる水の如く順調に進んだわけのものでは決してなかつた。今改めて此の二百數十年の長き治世を觀みるに、その間稍もすれば破滅の既に焦眉に迫らんとするを匡救せる改革の治三度が擧げられるのである。曰く享保の改革、曰く寛政の改革、曰く天保の改革である。人も知る如く、第一の改革は徳川幕府中興の祖と仰がれる八代將軍吉宗によつてなされたものであり、第三の改革に臨んだ當事者

は濱松藩主水野忠邦であつた。而して第二の寛政の治が奥州白河の藩主松平定信の偉材を待つて始めて效を納め得たことも今更茲に喋々するまでもない。

本書『樂翁公傳』はこの寛政の治の名爲政者松平定信の傳記である。樂翁とは定信の用ひたる號の一にして、早くは四十五歳の頃より斯く稱へたるの例も見られるが、殊に晩年に至りて専ら使用せられたるもの如く、「花月日記」「花月草紙」等はその語義を見るのが出来る。依つて世人多く彼を呼ぶに樂翁公を以つてするのが通例である。

公はもと御三卿の一なる田安家に生をうけ、その身は實に名將軍吉宗の孫にあたる。早くより才識英氣の凡ならざるものを示し、請はれて奥州白河十一萬石の藩主となるや、所謂天明の大饑饉を中心とする藩の疲弊を匡濟して其の治績を擧げ、やがて天明七年六月には衆望を背うて老中首座に推され、更に翌年三月將軍家齊の輔佐たる重職をも兼ね、而して爾來寛政五年七月に職役を免ぜられし時まで凡そ六年間、正に一代の大經世家として誠心誠意只管幕政の振興に盡力したのであつた。而もその時代は恰も世情の最も頹廢し、紊亂を極めた田沼時代の直後のこととて、時代は期せずして公の如き人格經綸共に卓絶せる大人物の出現を要求しつゝあつたのである。従つて此の難局に處する公の覺悟たるやまた壯となすべく、その就任の翌年天明八年正月靈巖島吉祥院の觀喜天へ捧げたと云ふ願文を見ても其の決意の程は察するに餘りがある。而して公はその尊崇する祖父吉宗の、世に享保の治と謳はれて居る善治を以つて専ら範となし、内治外交共に立派な治績を